慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	チヤールス・スミス著 英国食糧補給問題
Sub Title	
Author	山本, 登
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.2 (1941. 2) ,p.247(103)- 253(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19410201-0103
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410201-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

チャールス・スミス著「英國食糧補給問題」

山本　登

戰爭遂行のために、軍需資材と並んで食糧補給確保の問題が、いかに緊要なものであるかは、今更改めて說くまでもない。第一次歐洲大戰の體驗は、とくに工業國にとつて、その必要を痛感せしめた。ドイツの潛水艦による封鎖戰術に遭つて、イギリスがどれ程苦い經驗を嘗めたかは、史實に明らかである。ロイド・ヂョージは嘗て、「戰爭の究極的運命を決するものは、食糧問題であると」斷言した。世界いづれの國民と雖も、この所論に首肯せざる者はないであらう。

世界恐慌に引續く世界的な經濟的國家主義の傳播、經濟ブロック形成運動の波及に應じて、經濟的自給性の確立は、各國の念願とする所であつた。自國の勢力圏内における原料・食糧の獲得を目指して、飽くなき努力が續けられた。この頃から世界全地域に亘る資源調査が活潑に進められ、原料についても、食糧についても、列國の勢力比較が喧しく論ぜられた。所謂「持てる國」としての英・米・佛・ソ、「持たざる國」としての日・獨・伊の對立的狀態は、その頃の世界政治・經濟問題上の常識とさへなつた。むろんこの個々の場合については、それぞれの特殊事情が觀取せられた。例へばイギリスについては、大英帝國全般としての事情は、優位に存するとしても、本國のみを取上げれば、

原料・食糧において極めて惠まれざる狀態にある事、或は日本に關しては原料供給の點からは、必ずしも樂觀を許さないとしても、食糧については略々自給に近い等々である。

しかも東亞における日支事變の展開、歐洲における戰亂の勃發によつて、上述の世界的對立關係は、改訂の時期に遭遇したと見られる。わが國聖戰の進展、ドイツの歐洲大陸席捲を基礎として、東西相呼應しての世界新秩序の建設が叫ばれてゐる。かゝる事態に直面して、老大國イギリスの運命の歸趨こそ、目下世界注視の的である。

ドイツの果敢な英本土空襲、潜水艦・機雷による海上交通遮斷戰術によつて、イギリスは前回同樣、甚しい苦境にある。原料の約五―六割、食糧の約六―七割を輸移入に仰ぐイギリス本國の困難は、容易に想像される所である。とくにイギリスの場合、戰時下食糧確保の問題は、先づ第一義的に緊切であらう。（註）

（註）イギリス本國を中心とした大英ブロック内における原料並びに食糧の需給關係に關しては、拙稿「大英ブロック經濟における工業原料の自給性（三田學會雜誌第三十三卷第四號）及び「大英帝國の食糧自給性」（同第三十四卷第二號）を參照されたい。

現在イギリスがドイツに對して、粘り強く抗戰を續け得てゐる所以のものは、一つにはその强力な海軍力による海上權の保持、二つにはアメリカの全面的な援助に係つてゐる。その一方にして挫折せんか、抗戰力の甚大なる減殺が豫想せられ、又國内的には食糧不足に基づく混亂の釀成が危惧せられる。

食糧自給力の實狀については、前掲の拙稿論文において、論述した所であるが、その後にイギリス人自身の筆に成る本書、Britain's Food Supplies in Peace and War, by Charles Smith. 1940 を手に入れた。それが一九四〇年の六月、即ち第二次歐洲大戰勃發後、一年近くを經た時に刊行されたといふ點からも、イギリス食糧問題の近狀を傳へるものとして、玆に紹介する次第である。

その表題の示す如く、平時並に戰時におけるイギリス食糧補給狀況の叙述が、本書の内容である。戰時食糧政策確立の前提として、平時の狀態を知る事は、當然肝要である。しかも國民保健の觀點から、國民の生活維持に必要な食糧の最低限度を究明し、平時における實狀が果してこれに適ふか否か、若しこれを阻む要因があるとすれば、その要因は何處に求めらるべきか、が先づ論究せられる。各主要食糧品目別についての、かゝる分析を終つて後に、戰時における食糧統制への指針が引出されるのである。

かゝる見地に基いて、先づ平時において國民により、以上の滿足なる狀態を與ふるためには、食糧價格の引下げと供給の增加が要望せられる。そしてそのためには供給源に關する精密なる調査と分配方法改善の必要が推論せられる。その結果は、食糧輸入の問題、國内農業生産の問題並びにその配給問題が、クローズ・アップされて來る。しかもこれらは、既述の如く、國民の營養維持の問題との關聯において、考察されるのである。

第二章以下第十章にいたるまで、九種の主要食糧品が各個別に取上げられ、上述の意味においての檢討が行はれる。九種の品目とはパン、牛乳及同製品、鷄卵、肉類、ベーコン、魚類、野菜及果實、紅茶、砂糖等である。今個々の事情について詳述する餘裕を有しないが、その概要を掲ぐれば次の如くである。

（パン）　パンは言ふまでもなく、最も重要なる生活の糧である。しかもそれが下層階級の生活費の大なる部分を占めるといふ事實からして、食糧政策上の意義は、頗る重大である。したがつて平時においても、又戰時においては特に、その國家的統制の必要は絶對的と見られる。

（牛乳及牛乳製品）　牛乳については、イギリス國内の自給程度は高い。しかし需要の活潑なるために、價格は動

もすれば上騰する傾がある。國民營養保持の建て前からも、その適正化が必要視せられ、生活費の低下と並んで配給費の低減が求められる、そのためには、平時、戰時を問はず、國家管理の下における組合の活動が有効と見られる。

〔鷄卵〕　食用並びに製菓材料としての鷄卵については、國内生産高も相當ではあるが、一部は輸入に仰ぐ。近年におけるその比率は、大體六對四程度である。したがつてその增産の必要が力説される、さらにその反面においては配給機構の確立と販賣價格の全國的統一化が問題とされる。國民營養の點から見ても、それは當然の要求であらう。

〔肉類〕　イギリス國民の肉類に對する需要は、極めて大である。平時においてさへ、その供給の過半は、これを海外より得る事情にある。その主なる供給先は濠洲、新西蘭等の自治領の外、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ等の南米諸國である。したがつて戰時下その供給の確保に、腐心せざるを得ない事は明白である。戰爭勃發後における國家の輸入管理、配給統制手段の採用も故なしとしない。

〔ベーコン〕　ベーコンはイギリス國民にとのて、不可缺の嗜好品である。本品の取引に對する組織化は、戰前においては失敗に歸したが、今やその增産のために、燻製工場の國營化が進められつつある。

〔魚類〕　魚類の消費高は、玆二十年以來、增加傾向を辿り來つた。しかもイギリスにおいては鰹工業と鯡工業の勃興が、最も顯著である。これらは國内消費を可成りの程度に充足し、鯡工業製品の如きは、輸出能力をさへ示した。たゞ戰時下においては、必然漁業は停滯狀態に陷つてゐる。

〔野菜及び果實〕　この項目において、特に重要なのは、馬鈴薯、豆類並びに林檎、オレンヂ等である。大體野菜類についての國内自給率は大であるが、果實は林檎を除く外、輸移入に依存する程度が大きい。野菜も果實もその國内消費量は相當多量に上り、生産、配給、輸移入に關してすでに國家的統制が適用されてゐる。しかも重要食糧品として、その增産を目標に統制徹底化の必要はいふまでもない。

〔紅茶〕　紅茶は上・中・下あらゆる階層を通じて、イギリス國民の等しく需要するものである。その消費量の九〇パーセント以上までが、海外のイギリス領土より提供せられる。就中印度とセイロンは、最大の供給者である。その取引に關しては、一九二九年以來統制が及ぼされ、國民の需要を充たすために、熱心なる努力が拂はれてゐる。

〔砂糖〕　砂糖は次の二點において、前掲の諸食糧品と異つた事情に存すると見られる。その一は、戰前の全供給高の約四〇パーセントが、加工用、例へばシロップ、ジャム及び菓子類の製造に用ひられた事であり、その二は、イギリス本國における人口一人當りの消費量が、世界第一位にある事である。いづれにしてもその全消費量は極めて大きく、しかも國内消費の二割五分を充たす國内産出の甜菜糖を除く外、甘蔗糖の全部が輸移入に依るのである。したがつて戰爭勃發以來その供給に異常の努力が拂はれる反面、國内消費統制も嚴格に課せられてゐる。

以上項目別の考察の結果、著者によれば平時について大體次の如き國内自給率が算出せられる。（二二九頁）

牛乳	一〇〇％	バター	一〇％	鷄卵	六〇％
チーズ	一二五	馬鈴薯	略一〇〇	野菜	八〇
魚類	九〇	砂糖	二五	肉類	四〇
麥粉	一五―二〇				

この數字は確に一般に推定されてゐるよりは高率である。そして又、前記の個別的考察の際に扱はれたものの中からも、紅茶をはじめ二・三のものは脱落してゐる。とゝにイギリス人としての著者の意向は、充分に窺はれる。又假

令平時において斯の如き程度の自給力があると假定しても、これを以て戰爭に臨んだ場合の困難は、容易に想像されるであらう。

それは兎も角として、かゝる現況を嚴密に理解するためには、當然これら食糧品生産の地盤を成す所のイギリス農業についての考察が必要となならう。第十一章はそれに當てられる。

イギリス農業は過去百箇年の間に、非常な變轉を經過したと見られる。蓋し少くとも前世紀半ばまでは、穀物條例の保護をうけて、それは可成りの隆盛を示してゐた。その後の國内工業化の急速な進展は、他方において農業の相對的地位の低下を齎らした。農業保護の撤廢と海上交通の發展は、兩者相俟つて、イギリスをして食糧輸入國へと轉化せしめたのである。

第一次世界大戰の際の苦い經驗は、戰後において小麥、甜菜糖を中心に農業生産力の增大に向はしめた。しかもその成果は充分ではなく、近年においては僅に畜産方面において、可成りの好況が見られたに止る。尤も農産物の配給關係については組織化の傾向が促進され、可成りの合理化が進められた。しかも供給の絶對量の上において、見るべき改善が實現されなかつたのである。たゞその將來については低利資金の融通と價格政策の運用によつて、增産が期待されてゐる。しかし戰時下、急速な實行が望み難いのは止むを得ないであらう。

次いで第十二章はその配給問題について、近年の傾向を說明し、第十三章において戰時食糧問題を取扱ふ。そこにおいては、先づ第一次歐洲大戰の際の食糧統制狀況を概述した後、今次の戰爭にいたるまでの間の、食糧問題の經過を叙述する。

著者によれば第二次大戰までの間における重要な事象として、次の三點が擧げられる。即ち第一は、海外よりの食糧輸入の問題であり、輸入量の顯著な增大が指摘せられる。しかし、戰時に際しては、明らかに海上權掌握の必要と、他の軍需資源をも包含した綜合的管理の遂行が求められる。第二は國内生産の問題であり、戰時に備へては海上權確保の可能性と引合せて、その增産計畫を立てるべきとされる。蓋し無理な增産は往々にして失費を招くと見るからである。この點については、イギリス人がいかにその海軍力の强力さに信頼する事の大であるかゞ觀取せられる。第三は食糧配給の合理化問題であり、低廉な價格によつて、全國民への配給の普及が望まれる。

しかも今次の戰亂勃發に際して、叙上の三點のいづれから見ても、イギリスの事情は前回に比して不良であつた事が告白される。蓋し一九一四年と一九三九年の比較において、農耕面積において二百五十萬エーカー、農業人口において二十五萬人の減少が見出されるのである。しかるに貯藏の準備も不充分であつたし、こゝに於て、强力な戰時食糧統制の必要が不可缺となる。

現實において、戰爭勃發直後からの政府の異常な努力にも拘らず、最初數箇月の間は正に朝令暮改の感があつた由である。しかし究極する所、イギリスにとつては海外輸移入の確保が第一次的に緊要であり、目下そのためにすべての努力が向けられてゐると考へて差支ない。むろんその反面において、國内消費統制と共に農業增産計畫が進められつつある事はいふまでもない。しかしイギリスが能く食糧問題の觀點よりして、戰時を乘り切るか否か、それは一に係つて海上權掌握の如何に依存すると考へられる。果してそれは可能か否か。ドイツの攻擊も又この點に集中されつゝある現狀からして、その歸趨は、イギリス本土をめぐる今後の空・海戰の展開如何によつて決すると見るの外はなからう。（三越寶價、九圓九十五錢）